

賑わいと交流が生まれる拠点を軸とした、こどものまち・わかものまちなちの創出

指導教員 金沢大学 人間社会学域 地域創造学類 助教 丸谷耕太

金沢星稜大学 人間科学部 助教 連桃李恵

参加学生 <金沢大学>金井光甫・国重沙耶・佐藤真歩・菅村真央・原田梢吾・廣田佳菜子・

ヴィクトリア ヴォルフ

<金沢星稜大学>浅賀萌・川邊愛華里・小城弥優・長泉歩・古島千聖・宮本叶・坂川楓・

杉山美唯・中村祐貴・林かんな・山口夕紀・阪本風花

1. 活動の成果要約

野々市市で今年度から初めて実施された「こども会議」「わかもの会議」及び「こどものまち」の実施に携わり、その活動を支援した。これらの活動の目指すところは、子どもから若者までが連続的にまちについて考え、アイデアを実現することにある。さらにこれらの次年度以降の継続を可能にするために、マニュアルの作成をするとともに、先行事例調査による利点と課題の抽出、若者会議に取り組み自治体へのアンケート調査を実施した。

2. 活動の目的

- 1) 各種準備会議の企画：こども会議の開催（2回）、わかもの会議の開催（2回）を企画する。全体のプロセスデザインを行い、ワークショップを企画提案し地域団体とともに実施する。
- 2) こどものまちの実施体制の企画：イベント実施に向け、当日の運営マニュアル・会場レイアウトの作成、学生ボランティアの運営体制を提案する。
- 3) わかもの会議の調査：全国のわかもの会議（現在39事例を把握）の運営について調査を行う。また、野々市市におけるわかもの会議の参加者への意識調査を実施し、野々市市で適した実施体制を提案する。

3. 活動の内容

1) こども会議・こどものまち BomBomTown

<概要>

北陸で初めて開催される「こどものまち BomBomTown」の①仕組みづくり、②イベント当日の運営マニュアルの作成、および③イベントの運営を行った。イベントは野々市市市民協働課が主催であり、業務委託された一般社団法人はぐネットとの協働で、株式会社ガクトラボと連携しながら丸谷研究室が企画を担当し、連研究室が子どもの安心安全対策を担当した。

こどものまち実施に向けて、第1回子ども会議（6月22日）、第2回子ども会議（8月8日）を実施し、「まちの問題解決」、「起業体験」のセミナーを小学生対象に実施し、8月27・28日に「こどものまち BomBomTown」を開催した。当日は120名の小学生が参加し、無事に終了した。

<具体的活動>

6月8日に行った「スタートダッシュミーティング」では、イベント会場となる「にぎわいの里の



【写真1】BomBomTown フライヤー

のいち カミーノ」の視察とともに、製作した模型を用いて会場レイアウトのデザインを行った。その後、全国の事例を参照しつつ、①こどものまちの仕組み、②スタッフの役割、③タイムスケジュール、④子どもの仕事とその内容を決定し、以上を「スタッフ運営マニュアル」としてまとめた。

完成した「スタッフ運営マニュアル」は、初の開催となるイベントの内容の構築とともに、ボランティア・スタッフを含めイベントスタッフの情報共有として使用された。次年度以降のイベント開催の際にもこのマニュアルが活用できる。

子どものまちのイベント当日は、120名の参加者に対して、イベント運営スタッフとして関わった。始めに「まちのルール」を伝える学校、子どもが仕事を得る「ハローワーク」、銀行や警察・病院などの仕事場、子どもが店を出すための「起業相談所」、まちのキャプテンを決める「選挙管理委員会」など、それぞれの場所で子どものサポートを行った。また、各日のイベント終了時には学生が企画したアンケート調査を行い、子どもたちの反応や意見を集めた。



【写真2】ハローワークの様子



【写真3】商店街で起業

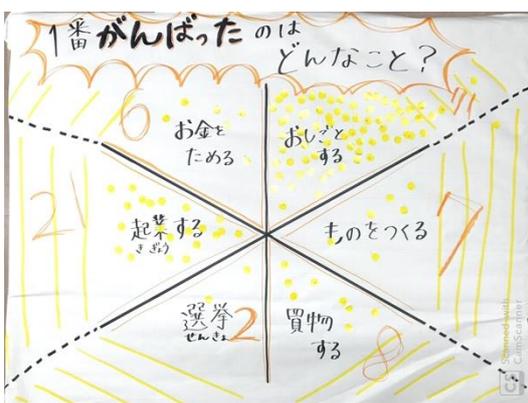


【写真4】キャプテンの演説

<子どもたちの反応>

イベント終了時に行ったアンケートでは、子どもからの反応がとてもよかったことが分かった。また、頑張ったこととして「おしごとする」を挙げた子どもが最も多かったが、「起業する」が次いで多く、積極的にお店を出して満足した子が多かった。参加した子どもの親からも下記のような意見があり、このイベントの目的である「子どもの自己肯定感」を育むことには寄与しているものと考えられる。

- ・税金のことなど今まで話したこともなかったのに、参加してから社会の仕組みに興味が出てきたようです。
- ・人前で発言するのを戸惑う子だったのですが、自分で考えたお店でお金を稼いだ(人が集まった)という自信がついており、また何かを創り出したい！やりとりしたい！という意見が高まりました。
- ・自分で作って販売したものを喜んで買ってくれた人がいた。看板を作って人を募集したら来てくれた。自分の行動で誰かが喜んでくれたり協力してくれたという経験がとても楽しかったと言っていました。



【写真5】子どもアンケート：がんばったこと



【写真6】子どもアンケート：わくわくレベル

2) わかもの会議の開催

＜野々市市における若者会議＞

今年度初めて実施される「わかもの会議」の運営を支援した。プレイベントとして、6月22日には、外部講師を招き「わかものまのまちの作り方」についての講義を聞き、野々市市の課題について議論した。7月23日も継続し、市の将来について若者同士でディスカッションを行った。

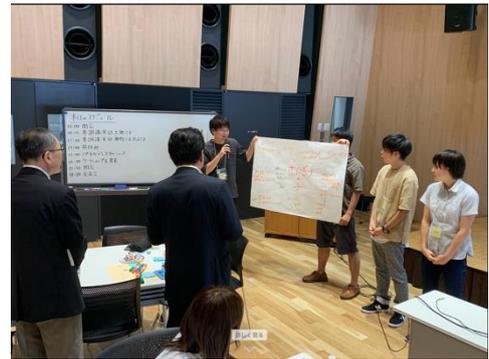
第1回となる「わかもの会議（#1会議）」は8月25日に開催された。参加者はゲスト講師からまちづくりの実践について学んだ後、野々市市の課題とその解決案を市長に提案した。

＜つばめ若者会議の調査＞

11月29日に「つばめ若者会議」を運営する燕市役所地域振興課にヒアリング調査を行った。燕市は現在継続8年目であり、若者の発案で74のプロジェクトが実施されている。先進事例として事業を継続するための要点を抽出し、後述するアンケート調査につなげた。特に、実際の運営における継続の要因として、以下が重要であることが分かった。

- ・コーディネータによるノウハウの提供
- ・行政によるサポート：連絡・会計・地域との調整等

行政は若者から出たアイデアを実現するための支援を積極的に行っている。例えば学校から会議の場までの送迎から、イベントを行う商店街の店一軒一軒への協力願いなど、その支援も多様である。このような支援のもと、若者は負担なく会議に参加し自由な発想でまちを活性化する事業を実施していた。また課題については、「目標を達成した後のメンバーの意欲を維持すること」との話だった。近い目標を立て2年で実現すると、次のステップに進む際にもう一度プロジェクトを見直し、改善することが必要とのことだった。



【写真7】市長に対するプレゼン



【写真8】燕市におけるヒアリング

3) わかもの会議：全国の事例を対象としたアンケート調査

＜調査の背景と目的＞

2015年以降、日本全国で多くの若者会議／議会の取り組みの事例が増えている。しかし、イベントとして単発で開催されるものも多く、本来の趣旨を考えるとその活動の持続性が求められる。そこで、本調査は全国で継続的に実施されている若者会議を対象とし、活発な会議や持続的な運営を可能にする要件を明らかにすることを目的とする。また、得られた結果を野々市市に取り組みに還元する。

＜全国調査の概要＞

調査期間：調査票配布_2019年12月27日(金)

調査票回収_2020年1月17日(金)

対象：全国で継続的に開催される若者会議・

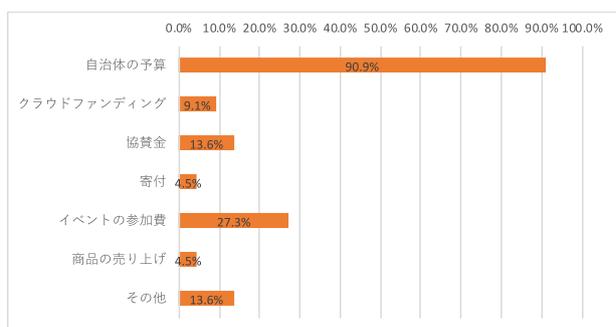
議会の運営組織 全36件

回収：22件 (61.1%)

調査項目：活動内容、参加者、事業費、
ステークホルダー、地域との連携

＜調査結果（一部抜粋）＞

図1から90%近くの若者会議で自治体の予算



【図1】自治体における若者会議の財源の割合

を財源の一部としている。また、今後の事業費についての設問では、自治体に完全に頼らず、自主財源に切り替えようとする若者会議も存在した。しかし、現在の事業規模を維持しながら完全に自主財源に移行するのは困難であり、時間も要する。経済的な継続性確保のためには、活動の成熟に合わせたファンディングを行う必要がある。

表1は、仕事内容に応じた各ステークホルダーの役割を示している。行政の負担が大きいのは明らかだが、地域によってはコーディネーターや所属メンバーが担当している場合もある。場所の手配などは行政が担当しており、会議・議会の進行などの役割をコーディネーターが担当していると答えた自治体が多かった。このことから、ステークホルダーの特性に合わせた仕事の割り振りをしていると考えられる。

【表1】運営における各ステークホルダーの役割

項目	行政	コーディネーター	所属メンバー
会議の将来計画	81.8%	45.5%	54.5%
運営のルールづくり	81.8%	40.9%	50.0%
事業をする目的の設定	77.3%	36.4%	45.5%
議会・会議の進行	45.5%	54.5%	45.5%
所属メンバーへの連絡	81.8%	31.8%	59.1%
活動についての相談	86.4%	45.5%	54.5%
ミーティングのセッティング	63.6%	36.4%	2.8%
地域や企業とのマッチング	50.0%	27.3%	31.8%
場所の手配	90.9%	22.7%	13.6%
人の手配	59.1%	45.5%	36.4%
備品等の手配	81.8%	22.7%	27.3%

4. 活動の成果

野々市市における「わかもの会議」について企画の補助支援を行い、8月25日のわかもの会議を実現した。また、「こどものまち BomBomTown」の企画・運営を行い、8月27、28日に実施した。子どもや親からの評価、行政からの評価も高く、なによりも事故なくイベントを催行することができた。

5. 次年度の計画

野々市市における「こどものまち」や「わかもの会議」は今年初めての開催となるため、次年度以降の継続が課題となる。「こどものまち」は、マニュアルを活用した運営のスリム化とともに、全国的に実施されている「こどものまち」のなかで野々市市らしい地域性の醸成に取り組む。また、若者会議の課題としては、野々市市在住の中高生の参加を増やすこと、イベントを継続的に行うことが挙げられるため、今年度の成果をもとにこれらに取り組む。

6. 活動に対する地域からの評価

<一般社団法人はぐネット 代表理事 高橋 美乃梨氏>

丸谷ゼミ・連ゼミの専門性が生かされ、当団体の弱みを補っていただきました。学生の主体的な学びを意識することと、当団体の要望の調整の”困難”も、達成したいビジョンに沿って最善の解決策を一緒に考え抜き、最後まで伴走することができました。ボンボンタウンでは、小学生と大学生が”お互いに認め合っている”空気感があり、”憧れの感情”や”やってみようという挑戦の気持ち”が、いつも以上に芽生えていました。土台となる方針やマニュアルも完成し、今後、質を担保しながら事業を安定継続していく上での貴重な連携となりました。

<株式会社ガクトラボ 代表取締役 仁志出 憲聖氏>

わかもの会議は全国的に運営形態が様々であり、野々市市ではどのように進めるか試行錯誤する中で、ゼミ生に集めていただいた全国のデータや事例が参考になりました。また、イベント当日には、ワークショップに慣れているゼミ生が各テーブルに入ってもらったことで、中高生の意見が引き出され、発表の完成度も上がりました。